六花

1

2023

りっかはいくかい

吉例いろは　福　笑

山田　六甲

石垣の一つ一つや城の春

六甲の畑の畔なる成木責め

初芝居恵俄雨出世花道

日本を賑し伊勢の初雀

ほとほとと杖に頼りぬ初詣

丿乀や書初の墨濃く摩つて

富札や手枕松の瓢水碑

散紙に慌てて包みお年玉

栗鼠は輪を掻き走りゐる御元日

ぬるみ来る茶屋の甘酒初恵比寿

留守番の役に参拝九拝なり

をちこちの畑に正月凧捻る

義理の息子泰志俊和還暦六甲喜寿祝

以和爲貴鳥総松

加奈陀から佛語になる年賀状

よろずなる初鶏鳴の御食国

田の神に餅花立てて祝ひけり

霊泉の初湯に足を洗はうか

其上の神々に初御食かな

つつと降るおさがり午の前に止む

追加してやはり減らして雑煮餅

年賀状やめると来たる賀状かな

何を見て過ごさむ三ケ日の空

PDF= 俳誌の salon

落城を知らぬ城より初景色
椋の実の追羽根の音しなやかに
歌会に招くと賀状来たりけり
ゐの中の蛙は気楽嫁菜摘む
野中なる泉に若水汲みにけり
重たくて若水こぼす女の子
くらがりに御食(みけ)を供ふる去年今年
やすらかな晩年などともぐら打ち
漫才のよけて行きたる仏の坐
消護謨(けしごむ)の干支の押しある年賀状
福笹の重みに襟のこそばゆき
小暗さの佛正月雪詣
恵方へと戌に曳かれてをりにけり

手作りの注連縄の幣手でくぐる
飴玉のにつきなつかし亥巳籠(いみごもり)
三宝をさげたる年の市田柿
菊も生け梅と松添へ祝竹
柚子に棘刺されし疵ぞ屠蘇を塗る
目に入れて痛くない孫福笑ひ
ミシンにもお鏡餅を飾る母
白鷺の城を真白に初鴉
干支は卯と答ふる尉と高砂や
昼酒をだれもとがめず三が日
もくづ蟹雑煮の出汁ともらひけり
千姫の化粧部屋なる淑気満つ
図星とは真中のこと弓始

PDF= 俳誌の salon

夢風撰巻頭

秋の江や細魚は水を織るごとく　升田ヤス子

あきのえやさよりはみずをおるごとく

「細魚」は春の季語であるが実際に秋の水面を句のごとく泳いでいた。そこで作者は秋の江という言葉の斡旋をしたのだが、そのうえ「水を織っているようだ」と詩的に詠って眼目とした。その辺はさすがベテランというほかはない。サヨリの泳いでいた別府運河秋の吟行会での嘱目。作者の思考回路がまだまだ新鮮で若い。

（六甲）

夢風撰巻頭

鳰鳥の向かひ合はせに潜りけり　廣畑育子

におどりのむかいあわせにくぐりけり

まず、カイツブリは潜った場所と浮いてくる場所が想像もつかない所が俳人に人気。掲句は正月らしくニオドリの仲のいい夫婦が互いに呼吸を併せて潜り、どこに浮くかは阿吽の呼吸で互いに分かっているのだろう。おめでたい作品

（六甲）

PDF= 俳誌の salon

雪嶺抄

雲の絵巻物　◎　笹村　政子

秋の空雲の流れの絵巻物
ゴンドラを下り立ち花野浄土かな
風あらば風にひろごる虫時雨
灯台に果つる岬や秋桜
時またず今日を咲きたる曼珠沙華
河川敷の昏みてきたる帰燕かな
捨窯に盛り塩あらた初紅葉
枝先に飛火したりし櫨もみぢ
紅葉してダム放流のとどろけり
篝火のゆらぎ無月の能舞台

秋の空雲の流れの絵巻物
　あきのそらくものながれのえまきもの

秋の雲の流れる様子に絵巻物を連想した。雲は流転の象徴であるが、特に「源氏物語絵巻」などは素晴らしい。この句もその源氏の流転のように次々と物語を生み、流れては消える。そのようなことを考えながら秋空に展開される雲の流れをみて楽しんでいる。「帰燕」の句。夕暮れの河川敷に明日帰る燕たちが集まっている。光景。燕は遠く南方へ昼間飛ぶが、ここでは帰る力のある燕が集って飛び立つのであろう。しかしここに集まれない燕もあるだろうに、とふと昔の忠臣蔵の討ち入りに間に合わなかった武士のこともふと。無月の能舞台。無月には風が伴うことが多い。その風にかがり火が強く揺れる動の炎を想像して楽しい。

蟋蟀抄

一本の糸　◎　志方　章子

洋梨の匂ひきたるやペンを置く
貝割菜ぴりりと話佳境なる
チョコレートコスモスなんて旨さうな
死人花なんて名は嫌まんじゆしやげ
捨てられて裏庭に鳴くちちろかな
蓑虫の糸一本を頼りとし
木守柿目印に行く友の家
うたた寝に木犀匂ひきたりけり
精のなき独り暮らしや茸飯
鳴らしたる鬼灯母の居たるころ

洋梨の匂ひきたるやペンを置く
　ようなしのにおいきたるやべんをおく

原稿か手紙かを書いていたら、ふと部屋に熟成させている洋梨（ラ・フランス？）が匂って来た。部屋に置いて忘れかけていた洋梨が食べ頃ですよと作者を呼んでいるのだろう。書いている原稿の筋を忘れるほどの匂い。そうだ、と文を中断して机を離れた。ペンを置く、というのは大変な決断だが、洋梨の匂いのほうが勝った。彼女の嗅覚を俳人の嗅覚と捉えるか、甘いもの好きの女性の嗅覚ととるかは読者の自由。ペンを置くくらい果物の食べ時の嗅覚としたほうがいいだろう。それはコスモの「チョコレート」という名に対する挨拶句、でもその才は発揮。蓑虫の糸一本やうたたねの句も佳かった。蓑虫が「糸一本」だけを頼りというのも芥川の蜘蛛の糸を連想させる。

PDF= 俳誌の salon

はまなす抄

秋の江　◎　升田ヤス子

コスモスの風の通へる牛舎かな
村沈むコスモスの海膨らめば
柳散る鞠の懸りを掃くほどに
秋あかね群るや波乱の予兆かも
雁渡し古江に揺るる舫ひ船
色変へぬ松や海光あまねくて
神苑や小松余さず手入れされ
秋の江や細魚は水を織るごとく
オリーブや別府のみなとの日に熟れて
花臭木黒蝶離れあへずなる

秋の江や細魚は水を織るごとく
あきのえやさよりはみずをおるごとく

「村沈むコスモスの海膨らめば」について、先月ヤス子は姉上の逝去など胸に風穴があいた。その中で俳句を休まずコスモスに挑む。いくつになっても俳句への情熱は熱い。ちらほらと咲き始めたコスモスの本格的に咲いてくるとまるで村が沈むほどの咲きようであるとデフォルメしたが、そのデフォルメこそが俳句の詩。「神苑」の松は小さな松の木まで丁寧に手入れが行き届いている、と感銘。その小松もやがて歳月を重ねて歴史的名跡の庭を飾るだろうと将来を見ている。中でも「秋の江」の句は細魚（サヨリ）を詠んで力をみせた。サヨリは春の季語なので季語を秋の江とし、水を織ると言い当てたのは手柄。

聖五月抄

鰯雲　◎　善野　行

暗がりの溝に露草浮かびけり
さやけしや赤子の垂らす涎さへ
鰯雲赤子を天にさし上ぐる
秋天の雲のかたちを子に問はる
うちつけに月下美人の匂ひけり
コスモスを裳裾に古寺の五輪塔
忘れ得ぬ人ありて摘む思ひ草
別府・住吉神社
鵙鳴くや手枕の松駆け抜けて
追悼赤松正義さん
人知れず薄が原にゆかれけむ
宛名書きをればやさしく小鳥来る

鰯雲赤子を天にさし上ぐる
いわしぐもあかごをてんにさしあぐる

赤ん坊を高い高いと差し上げた。赤ちゃんは普段は見られない高さから世界を見ることができ、普段の視点とは違った物の見方を知ることは、赤ちゃんにとって楽しい刺激。いつもは見あげているパパママが自分より下にいるという状態も、赤ちゃんには発見と驚きに満ちているはず。その様子を素直に詠んだようだが、「さし上ぐる」としたので、天にさしあげますから、天の御意思のままにこの子を育ててくださいという意味も重なり、すくすくと育ててくださいという願いもこめたほほえましい光景。また「雲のかたちを子に問はる」の句も難問であるが、動物や魚鳥など想像力を育て、情緒を育むように伝えている自分（大人）を想像させる作品。動物だけでなくアニメーションの主人公などでもよいような気もする。故赤松君を偲んでの句もしみじみとした追憶の作品。別府吟行の鵙の句も駆け抜けてというのがいかにも瓢水をにおわせる挨拶がいい。瓢水は放蕩の途中母が亡くなったのを人づてに聞いて「されぱとて石にふとんも着せられず」と詠んだ。以前瓢水の母の実家を三木市に訪問したことがある。

PDF= 俳誌の salon

別府抄

鳰　鳥　◎　廣畑　育子

凌霄花播磨下里無人駅
警笛や北条鉄道黄コスモス
白萩や雲ひとつ無き法華山
里山の家々に成る小粒柿
秋草を行けばふはりと沈む靴
熟れ棗しはしはなりぬ廃線跡
豊の秋ソーラーパネルすぐそばに
鳰鳥の向かひ合はせに潜りけり
薄皮のほろり茹でたて落花生
秋夕焼染むる水面に長き水尾

鳰鳥の向かひ合はせに潜りけり
　　におどりのむかいあわせにくぐりけり

鳰は「におどり」でカイツブリのこと。鳰の海といえば近江の琵琶湖を言う。この句は近江とは限らないが、番(つがい)の二羽が申し合わせたように同時同場所に向かい合わせで水に潜った、とまるで近松の戯曲を思わせる行動をとったと思わせる句の仕掛けがある。鳰の特徴は潜った場所と予想もつかない所に浮かぶのが面白く俳句でも人気がある題材。二羽が同時に潜って同じ所でなく別々の所に浮かぶかも知れないと変な期待がある。

一句目の「凌霄花」の作品は十七音総て漢字で表現して芸の広さを感じさせてくれた。「茹でたての落花生」の句。関東ではなじみの深い落花生だが、近畿では落花生に向いた土壌ではないため、上手く育つかどうかは知らない。昔、千葉の俳人から生の落花生を送ってもらったことがあり、茹でて食べるのを知った。

垂水抄

芒の香　◎　永田万年青

両岸の芒の香して誘へる
秋日傘坐して夢中に句を作る
コスモスの丘気持ちよく疲れけり
青空とせつぱんしたる秋桜
コスモスの坐れば隠る二人かな
単調な槌音入りし秋の空
鳶職の休憩厳守天たかし
混雑の医院を出れば秋夕焼
こむら返り二日続きてそぞろ寒
夢を見し目を閉ぢしまま秋の朝

両岸の芒の香して誘へる
　　りょうがんのすすきのかしていざなえる

芒の香りを嗅ぎ取ったところは素晴らしい。が「両岸」がよくわからない。作者がどの位置で芒の匂いを嗅ぎ取ったのか知りたい不満が読者に残る。これはおそらく作句する場所が常に限定されているものと思われる。自在に遠出することも出来ない場合、過去の芒を見た場所を思い起こしてあてはめてはいかがだろう。だが芒の匂いとは素晴らしい感覚で、誰にも詠めない独自性がある。芒の季節に芒の河川敷など、作者は昔自動車であちこち走り回っていたはず。この間彼に言ったが、もし行きたい所があれば私も今のうちならオンボロ車で連れていけるよと。

PDF= 俳誌の salon